

日本科学振興協会の設立

春日 匠 かすが しょう

日本科学振興協会理事

馬場基彰 ばんば もとあき

日本科学振興協会代表理事／京都大学

NPO 法人日本科学振興協会(JAAS)¹⁾は、「人類の福祉向上および持続可能な社会の実現」のために、多様性、衡平性、包摂性を組織運営の理念とし、自然科学のみならず、人文社会科学なども含めた幅広い意味での科学を振興する団体として設立された。2022年2月に東京都からNPO 法人としての認定をうけ、法人登記も完了している。来る6月18日(土)～24日(金)に第1回総会・キックオフミーティングを開催する予定である。その設立の経緯について紹介する。

全米科学振興協会のような団体を日本にも

科学者・研究者と一般社会の「コミュニケーション不足」がかねてから指摘されてきた。例えば、1990年代には、一方通行のレクチャーではなく、科学的なトピックについて専門家と一般市民が気軽に話し合う「サイエンスカフェ」がイギリスで発案され、2006年ごろから日本でも盛んに行われるようになった。先進国の大半において科学者コミュニティは、一般公衆と双方向のコミュニケーションを取ることに努力するようになってきている。

しかし、欧米の国々と日本の大きな違いは、科学に関わるさまざまな人々からなるボトムアップの団体がないことである。これは日本における科学の振興について、垣根を越えて検討する場がないということでもある。多くの国ではその国を代表するような科学者の集まりであるアカデミーとは別に、科学の普及団体として、駆け出しの研究者や、科学教育に携わる草の根の人々が参加する組織が存在する。著名な科学雑誌『サイエンス』

を発行していることでも知られる全米科学振興協会(American Association for the Advancement of Science; AAAS)は、その最もよく知られたものである。

AAASの活動は出版以外にも多岐にわたる。博士号取得者を議員事務所などの政策機関に送り込む政策フェローは、米国の科学技術政策の質向上に大きく寄与している。初等中等教育でのSTEM教育にも、政策提言などの形で貢献する。そういった提言の一つとしてScience for All Americansは日本でも話題になった。その他、女性や第三世界出身の研究者、「自由と責任」のための研究を行う研究者のための賞などを提供している。

米国の科学者の多くに、こうした活動を通じて、科学に関する公衆の理解と認知を高めることが、科学を振興する最もよい手段であるという認識が共有されていると言えよう。

日本でも、科学者と一般社会のコミュニケーションの場として、また多くの科学者の意見を集約し、代弁するための組織として、AAASに相当するものが必要なのではないかという意見はあったが²、なかなか実現には至らなかった。

設立への経緯

筆者の一人である馬場が、科学コミュニティ活動を行ってきた人たちから協力者を集めようと考えたのは2018年秋のことだった³。長年活動してきた人たちと相談すると⁴、より多くの多様な人々を巻き込み、継続して活動に取り組んでいくことを意識すべきであり、そのためには日本版AAASの設立を目指すべきだ、となった。人が集まる機運が高まっていたのだと思う。2019年8月に有志12名で初の会合を開き、趣旨書などをまとめて、さらに声をかけると、有志は数十人となった⁵。2020年2月にハイブリッド形式で会合を開いた後は、ほぼオンライン会議のみで討議を重ねた。あらゆる人々に開かれた団体であるという趣旨などを踏まえ、日本版AAASをNPO法人として設立する準備をする団体として、公に

委員と賛同者を集めていく方針を固めていった⁶。2021年2月に日本版AAAS設立準備委員会を発足させたところ、大学・研究機関や民間企業に所属する研究者・技術者だけでなく、学生、小中高校や塾の教育関係者、研究支援や科学コミュニケーション、ジャーナリズム、あるいは芸術といった多様な分野に携わる人たち、科学行政に携わる人たちなど、200名近くの委員と800名近くの賛同者が集まった。組織のあり方について侃侃諤諤の議論を重ねて、冒頭に述べた理念と趣旨書、NPO法人としての定款が固まった。2021年11月に設立総会を開催し、12月に東京都にNPO法人設立の申請を行い、2022年2月に認可された。3月から正会員その他いくつかのカテゴリーの会員を募集している(詳細はウェブサイトをご覧ください)。

キックオフミーティングとこれから

6月開催予定の第1回総会・キックオフミーティングでは、研究者からの発信として講演やポスターセッションの他、研究環境改善のためのパネルディスカッション、科学を身近に感じ、楽しめるような企画(オンライン)なども計画している。同様の年次大会を今後、毎年開催していく予定である。

継続して科学を振興していくために、社会的に責任ある体制を作っていくことが重要であることから、寄付控除のある認定NPO法人を目指している。今のところはまだ夢の域をでないが、JAASがAAASの『サイエンス』誌に対抗するような総合科学雑誌を発行する日もくるかもしれない。

昨今、「選択と集中」ではなく、長期的な視野のもとで一見役に立たない基礎研究をすることがイノベーションを産む上でも大事、と社会に訴えたい科学者は多い。科学の振興のためには、科学の魅力を社会に伝え、科学教育を推進し、持続可能な社会につながる活動を展開し、グローバルなネットワークを構築するといった活動も担うべき

だろう。

さらにJAASは、社会を構成するさまざまな人々が科学や科学者をどう捉えているのかを知り、人類と社会のために科学がどうあるべきかを一緒に考え、協働していく場になるはずだ。ゆくゆくは社会における科学の在り方について世界に模範を示せる団体になればと考えている。皆様のご参加をお願いしたい。また、批判的なものも含めてご意見をお寄せいただきたい。

注

1—<https://jaas.science/>

2—たとえば、NPO法人サイコムやScience Talks(科学コミュニティの対話活動を推進するネットメディア)などの場で提起されていた。

3—きっかけは、馬場が自民党の「科学技術基本問題小委員会」の存在を知り関係者にメールを送ったところ、「学術研究の制度をより良いものにしていくために、当事者である現場の研究者の声を沢山集めて政治家に届けてほしい」という趣旨の返信を受け取ったことだった。

4—この間には、学術系クラウドファンディングの関係者からScience Talksを紹介してもらい、日本の科学を考える活動「ガチ議論」の関係者ともつながった。また、日本学術会議の若手アカデミーとも、一緒に活動を広げていこうということで意気投合した。

5—このときに、設立準備委員会委員長／のちにJAAS代表理事の一人である小野悠(豊橋技術科学大学)も加わった。

6—この間の2020年秋に日本学術会議の会員任命を巡る問題が発生した。我々はこの問題とは一切関係なしに、その前から準備を進めていたわけだが、この事件が私たちの活動についての社会的な注目につながったことは否定できない。ただ、先に述べたように多くの国ではアカデミーと普及団体が相補的に存在するのであり、日本でも、日本学術会議との間には同様の関係が築けるものと考えている。